東京バッハ合唱団 月報

［第 759 号］2025 年 9 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR TOKYO
Monthly Newsletter No.759
September 2025
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo Japan

東京バッハ合唱団、“第２楽章”の始動にあたり

活動理念を再確認する

合唱団の練習も夏季休暇を終え、8 月 23 日の土曜日より、新しい体制での“新学期”が始まりました。

次回定期演奏会（第 124 回、2026 年 5 月 - 6 月に開催予定）の曲目は、以下の 3 曲です（大村恵美子訳詞）。

・カンタータ第 10 番《わが魂 主をあがめ》
・カンタータ第 196 番《主は覚えたもう われらを》
・カンタータ第 20 番《雷の言葉 おお なんじ永遠よ》

＜次回公演曲目＞

うち BWV 196 は、ミュールハウゼン・ブラージウス教会オルガニスト時代（1707-08）の作曲、「初期カンタータ」中の一作です。22 歳から 23 歳、青年バッハのみずみずしさに溢れた小品、身内の結婚式のために用意したものと考えられ、明るい親密さを覚えます（使用楽譜は「50 曲選」に 2002 年既刊）。

他の 2 曲は、それから 17, 8 年を経たのちのライプツィヒ・トマス教会でのカントル職（礼拝音楽担当者）就任 2 年目、すなわちカンタータの驚異的豊作の最中にある 2 作品で、後に「コラール・カンタータ年巻」と称される一群のシリーズ（全 40 曲）の巻頭第 1 作（BWV 20）、および第 5 作（BWV 10）となったものです。バッハ 39 歳、壮年期の絶頂にある巨大なエネルギーを秘めた力作です（後述。楽譜は 2 曲とも最新刊、2025 年 9 月）。

それぞれ、初期カンタータとコラール・カンタータの典型を味う、魅力的な選曲となったはずです。

＜新体制のスタート＞

さて、主宰者大村恵美子は、去る 3 月に満 94 歳を迎えたのを機に、指導体制から引退することを公表し、前回の公演（第 123 回定期、5/31 荻窪教会、6/7 三崎町教会）をもって最終の本番指揮とさせていただきました。両会場とも、超満員のご参集をいただき、本人も、終了の指揮台から「大成功！」とご挨拶させていただいたとおり、満足のいくステージだったようです。改めて、みなさまに感謝を申し上げます。

これまで、毎回の練習日には無欠席で頑張っていましたが、ここ数年、さすがに体力に衰えが見え、本人も細かい指導に支障を感じるようになっていたようです。以前より周囲には引退の意志を伝えていましたが、ご存じのとおり、長期にわたる活動の先駆性と独自さ、実績の膨大さなどを見るに、後継指導陣の選任をはじめ、引き継ぐべき体制の構築は一朝では叶いません。全団員の知恵を結集して前へ進めている最中です。

さいわい当合唱団の団員は、ベテランも新人も実力者ぞろいで、外の合唱団・聖歌隊・教育機関などでの指揮・指導にあたっているメンバーも多く、普段の音取り、音楽造りのリーダーには事欠きません。歴史の厚さの賜物です。また近年、協演をお願いしている中堅声楽家や、院生・若手の方々にも、機会あるごとに練習場での指導をお願いしています。彼らの中から、将来の後継指揮者が現れることを願っています。

＜活動理念の再確認＞

合唱団の“第 2 楽章”は、1962 年創始の瞬間より微動だにしない「バッハを日本語で歌う」というコンセプトを、より明確にかざしながら、さらに展開させることになるでしょう。

以下の項目を掲げて、確認しておきます。

・バッハ合唱曲日本語上演の実践と普及
・日本語版楽譜の出版（普及手段として）
・「月報」の発行（団内外の交流の場、理念普及とＰＲの媒体として）

第 2 楽章は、皆さまとともに始めさせてください。お励ましとご協力をお願いします。＜ア＞

■古代蓮（撮影：千葉光雄、2021 年・埼玉県行田市）

月報 2025 年 9 月号 CONTENTS

・バッハ・カンタータの場景 19（大村健二）… p. 2-3
・新規楽譜、第 3 弾・第 4 弾の発行 … p. 3
・連載：退屈するのはいそがしい［55］（大野博人）p. 4

究極のカンタータ（？）

《雷の言葉 おお なんじ永遠よ》BWV 20
O Ewigkeit, du Donnerwort

大村 健二（団員）

バッハがライプツィヒ・トーマス教会カントル職に就いて2年目の職務を、「コラール・カンタータ年巻」として纏めてみようと思い立ったのは、生涯でもっとも野心的な計画であったのだそうだ（クリストフ・ヴォルフ著「バッハ 音楽創造の宇宙」春秋社、2025年4月刊、原書はNew York 2020）。

その巻頭第1作に当たるのが、われわれの次回公演の曲目《雷(いかづち)の言葉 おお なんじ永遠(とこしえ)よ》（BWV 20）であり、もう一つの演目《わが魂 主をあがめ》（BWV 10）も、同じくその第5作目となる。

これを機会に、バッハのコラール・カンタータに触れ、なかでもヴォルフがバッハの「野心的な計画」と看破したコラール・カンタータ年巻の劈頭の第20番に注目してみたい。

◆トーマス・カントルの職務

バッハの職務（トーマス・カントル）は、礼拝音楽を必要とするすべての日曜日・祝祭日のためにカンタータその他の典礼音楽を準備し、演奏することだった。音楽が控えられた何週か（待降節前や受難節前など）の日曜日をのぞく60日ほどが年間の演奏機会となり、就任1年目を終えるときには、その回数分、合計で60曲ほどが蓄積されたことになる（事情による欠けもある）。このカンタータ作品の束を「第1カンタータ年巻」と称する。バッハは来たる第2年目の仕事（「第2カンタータ年巻」）として、コラール・カンタータの可能性をあらゆる方角から追及してみようと企図したらしい。

バッハは、1723年5月30日の日曜日にカンタータを演奏して、ライプツィヒでの初仕事とした（BWV 75）。この日は、教会暦で「三位一体節後第1日曜日」にあたり、トーマス教会付属学校の学年度の開始日でもあった。

教会暦の用語はいろいろ煩わしいが、バッハ・カンタータの成立の前提でもあるので、事あるごとに確認させていただきたい。「三位一体節」は、キリストの復活から50日を経て、弟子たちの集まるところに聖霊が降り（「聖霊降臨」、前回公演のBWV 34参照）、「神」と「キリスト」に「聖霊」を加えて三位一体となったことを祈念する祝祭日。その翌週から三位一体節「後」の日曜日が始まり、20数週間（ほぼ半年、年によって増減あり）に及ぶ「三位一体節」期間を経て教会暦の一年間を終え、新たな「待降節」を迎える。教会暦の1年とバッハの職務の1年には、ちょうど半年のずれがあったことを覚えておいてほしい。

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

■金持ちとラザロ（11世紀の装飾写本，ニュルンベルク・ドイツ国立博物館蔵，出典 Wikipedia）
上段：ドアの外で施しを乞うラザロ．足のできものを犬が舐めている．
中段：死後ラザロの魂は天使によって天国に運ばれ，アブラハムの胸に迎えられる．下段：一方，金持ちの魂は悪魔によって地獄に連れて行かれ，業火の拷問を受けつづける．

毎回、新たな歌詞を調達し、作曲し、各パート譜を用意し、合唱隊の少年たちを指導し、全奏者を率いて日曜または祭日の礼拝に間に合わせる、といったルーティンを想像すると、ほぼ週に1曲の上演ペースは超人的である。

◆「コラール・カンタータ」について

バッハの時代を迎えるころ、ルター派の讃美歌（コラール）を中心に据えたカンタータが見られるようになった。バッハの初期作品《キリスト 死に繋がれ》（Christ lag in Todesbanden BWV 4）に見るように、カンタータの全体が、あるコラールの全詩節をまるまる楽曲とした作品が、ブクステフーデなどに現われる。BWV 4は、その範疇からまだ出ていない。

コラールを登場させた目的は、日常生活のなかで歌い親しんでいる「愛唱讃美歌」を礼拝音楽の中核に据えて、会衆の心をつかむことにある（改革者ルターの理念）。

ライプツィヒ初年度の仕事の中にも、いくつか姿を現すが、「コラール・カンタータ」は外観的にいうと、ある特定のコラールを基盤においたカンタータの形式であり、必ずしも全詩節を登場させる必要はない。バッハの場合、典型的には、1）冒頭合唱で、コラールの

旋律を基礎に大規模な合唱曲として展開する（しばしば冒頭詩節が歌詞となる、フーガ的に処理など）。2）中間楽章で、そのコラールの他の各詩節の歌詞を自由に書き替えて、レチタティーヴォやアリアに仕立て直す（当日の聖書箇所との連関をここで示すこともある）。3）終曲合唱は、当のコラールを 4 声体合唱で簡潔に歌って閉じる（最終節など）。

◆金持ちとラザロ、カンタータ第 20 番の悲痛な物語

当時の礼拝では、当日の教会暦に指定された聖書箇所が朗読された。三位一体節後第 1 日曜日のそれは、「金持ちと貧しいラザロ」（ルカ 16, 19-31）と要約される箇所で、バッハの時代では、誰もがこどものころから知っている。物語のあらすじは前ページの挿図のとおり。しかし朗読箇所の大半は、救いを懇願する地獄の金持ちと天上のアブラハムとの対話で占められる。先ずは福音書の物語を読んでいただき、できればＨＰ上の上演用訳詞にも目を通していただきたい。

主題は暗く重い。歌詞台本の作者は知られていないが、基本とされたヨーハン・リストの、同じ表題のコラールの全 16 節を、冒頭と第 7 曲と終曲とでは元のまま、他の楽曲では種々に敷衍して、2 部構成、全 11 楽曲の大きなカンタータ作品へと整えた。概要一覧表（下掲）の楽曲構成欄に、各曲の歌い出し句を載せておいたが、それを一瞥するだけでも、2〈とわに続く災い〉、3〈永遠よ　われ怖る〉、4〈責め苦の絶えざる〉と繰り返す。地獄の苦しみが「永遠」に続くのであれば、絶望以外の何物でもない。これが〈雷の言葉〉である。この息苦しさが、第 2 部でどう打開されるのか、あるいは絶望のままか。

カンタータ第 20 番《雷（いかづち）の言葉　おお　なんじ永遠（とこしえ）よ》
O Ewigkeit, du Donnerwort　BWV 20

［教会暦］三位一体節後第 1 日曜日〔他に BWV 39、BWV 75〕
［使徒書］第一ヨハネ 4,16-21（神は愛である）
［福音書］ルカ 16,19-31（金持ちと貧しいラザロ）
［成立］初演 1724 年 6 月 11 日、ライプツィヒ
［歌詞］台本作者不詳。J.リストのコラール「いかづちの言葉　おお汝　永遠よ」Johann Rist “O Ewigkeit, du Donnerwort”（1642）を基本とするコラールカンタータ。第 1, 7, 11 曲は、同コラールの 1, 11, 16 節。その他の楽曲も、同コラール中間節の引用を含む書替え。
［編成］独唱 ATB、合唱、スライドトランペット、オーボエ 3、弦合奏、通奏低音

［楽曲構成］

楽章	冒頭句　原詞/訳詞	編成/調
	第 1 部	
1.合唱	O Ewigkeit, du Donnerwort 雷(いかづち)の言葉　おおなんじ永遠(とこしえ)よ	tp,ob3,str,bc ヘ長調
2.Recit (T)	Kein Unglück ist in aller Welt とわに続く災いは	bc
3.アリア (T)	Ewigkeit, du machst mir bange 永遠(とわ)よ　われ怖る	str,bc ハ短調
4.Recit (B)	Gesetzt, es dau'rte der Verdammten Qual されどその責め苦の絶えざるとも	bc
5.アリア (B)	Gott ist gerecht in seinen Werken み神は正し　主　正し	ob3,bc 変ロ長調
6.アリア (A)	O Mensch, errette deine Seele 人よ　なが魂　救え	str,bc ニ短調
7.コラール	Solang ein Gott im Himmel lebt 神　高きにあり	tp,ob3,str,bc ヘ長調
	第 2 部	
8.アリア (B)	Wacht auf, wacht auf, verlornen Schafe 目覚めよ　迷える羊	tp,ob3,str,bc ハ長調
9.Recit (A)	Verlaß, o Mensch, die Wollust dieser Welt 人よ　棄てよ　世の愉しみ	bc
10.二重唱 (A/T)	O Menschenkind, Hör auf geschwind 人の子よ　世と罪好むを　終らせよ	bc イ短調
11.コラール	O Ewigkeit, du Donnerwort 雷の言葉　おおなんじ　永遠よ	tp,ob3,str,bc ヘ長調
	［演奏時間］	約 26 分

［上演用訳詞］大村恵美子 http://ss964897.stars.ne.jp/bwv020.htm
［上演履歴］未演、2026 予定

◆カンタータ作品の一つの究極か（？）

前出のヴォルフにはこんな一文もある。

「1724 年 6 月 11 日、学年度が公式に始まる日、バッハのカンタータ第 2 年度は前代未聞の幕を開けた。とはいえ、そこに居合わせたおよそ 2000 人の会衆の中に、バッハが始めたこと、すなわち［この曲の］序曲の冒頭、そしてこれに続くいくつもの楽章がとてつもない意味を持っていることを理解したものはほとんどいなかっただろう」（訳書 162 ページ、松原　薫訳）。

バッハの生涯には、特定の楽器、あるいは様式や技巧、目的に特化した連作形式の作品が数多く残されているが、39 歳のバッハは、第 2 年目の仕事を通して、「コラール・カンタータ」の可能性を追求しようと決意したのだという。

やる気は横溢している。確かに出来上がった作品の質は持てる技量の頂点に達していた。それだけに、歌う方は“地獄の責め苦”を味わいそうである（ただし、コーラスにとっては冒頭の 1 曲のみ！　あとは独唱者のみなさん、よろしくお願いします）。

バッハの目の前の聴衆にとっては、耳と心に馴染んだコラールの存在、幼い子どものころから親しんだ聖書物語……。が、遠い東洋のわれわには明確な手引きがあったほうが良いだろう。そこで、今回探してきたのが前頁に掲げた中世の写本である。細部までよく目に焼きつけて、鑑賞のヒントとしていただきたい。

いつにも増してすっきりした出来上がりで、ご披露したいものだ。〈了〉

日本語版バッハ・カンタータ楽譜選集
“新装”第３弾、第４弾 同時発行
（既刊：全 86 曲）

●**カンタータ第 10 番《わが魂　主をあがめ》**
ISBN 978-4-911195-02-4　¥2000

●**カンタータ第 20 番《雷のことば　おおなんじ永遠よ》**
ISBN 978-4-911195-03-1　¥2300

創業 300 年の老舗 Breitkopf ＆ Härtel 社が認めた、訳詞の質の高さと制作の完成度、全世界に通用する新しい装いで登場。手にとってご覧ください。

制作/発行：東京バッハ合唱団出版局
office@bachchor-tokyo.jp

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［55］

小さいと大きい

安曇野閑人　**大野 博人**

列車の中で、車掌がイラスト付きの紙と鉛筆を配りにきた。

「これでビンゴ遊びしてください」という。

カナダのケベック州の大都市モントリオールから古都ケベックシティーに向かっていた。3 時間半の旅だ。

紙には縦横 5 列、計 25 のマス目があり、一つ一つにかわいらしい絵が描かれている。牛や馬などの動物、バスやタクシーなどの乗り物、ホテルやレストラン、学校、川、踏切も。一見、雑多な組み合わせだ。

「車窓から見えたものを順番にチェックしてみて」

子供向けの遊びのよう。でも、なんで年寄りの私たち夫婦にまで手渡したのだろう？

まあいいかと、時間つぶしにやりかけたら、これが案外むずかしい。どこにでもありそうなものばかりなのに、なかなか視界に入らない。なにしろ、車窓から見えるのはほとんどが延々と続くトウモロコシ畑と森なのだ。ケベックがどんなところか、実感してもらうための工夫だったのかしら。百聞は一見にしかず。

ケベック州は仏語圏として有名だが、カナダの 13 の州、準州の一つにすぎない。人口は 850 万人。他方、面積は日本の 4.4 倍。人口密度は 1 平方キロメートルあたり約 5 人。334 人の日本よりはるかに少ない。

小さいんだか、大きいんだか……。

40 年近く前、パリのジャーナリスト学校の仲間たちとスペインのバルセロナに列車で向かった。パリを出て間もなく、車窓から見えるのはフランスの田舎の風景になった。広々とした麦畑やブドウ畑に囲まれた町々。人の姿もまばら。工業地帯や商業施設、住宅街がほとんど切れ目なしに続く東海道新幹線などの車窓とはまったくちがう。

のどかで、のんびり。癒やされるような気分に浸っていたら、前の席に座っていたカナダ人記者、キャロルが同じ風景に目をやりながらこう言った。

「ずいぶん家や人が多いわねえ」

彼女の出身地はケベック州だ。いったいどんなところだろう、と驚いた。

今回のカナダ滞在では、モントリオールにも足をのばし、久しぶりに彼女と再会した。

郊外の自宅に招待された。彼女の夫と娘も加わって庭で夕食を楽しんだ。都心から車で 30 分足らずの住宅街。とはいえ、近くにはセント・ローレンス川が流れ、河畔は広大な公園になっている。

「ここはもう田舎みたいでしょ」と彼女。たしかに。エンジニアだった彼女の夫は広い畑を近くに借りて、野菜作りを楽しみ、大学を出たばかりの娘さんは、遺伝子工学の専門家として地元の研究機関に就職し自転車で通勤しているという。

しかし、のびのびとしているように見えても悩みはある。ここのところ「アイデンティティ」が揺らいでいるという。カナダは移民の国だ。多様性を高く掲げている。ただケベックは仏語圏という特性から、英語圏ほど移民の流入は早くなかった。それでも最近は仏語圏のマグレブ諸国などに加え、英語の方が得意なアジア方面からもかなり増えているそうだ。英語がじわじわと幅をきかせるようになっている。

カナダ全体では仏語人口は少数派。小さなものが大きなものに呑み込まれていくかもしれない不安が漂う。

ケベック旅行からトロントに戻った後、米国とカナダの国境にあるナイアガラの滝を訪れた。バスで 2 時間あまり。

壮大な景観だった。水は幅 650 メートルにわたって 50 メートル以上の高さから流れ落ちる。川の近くに立つと、しぶきが雨のように降りかかる。1892 年に訪れたドヴォルザークは「これはロ短調の交響曲になる」と感嘆したそうだ。結局、交響曲にはならずに、有名なチェロ協奏曲になった。

大作曲家に名曲を発想させるほどの大きさ、美しさ。ただ、その周辺に目を移すと違和感に襲われる。

土産物店や飲食店どころか、滝の高低差を遙かに超える高層ホテルやカジノも建ち並ぶ。滝壺近くまで大きな観光船が行き交う。上空から眺める熱気球も上がる。両岸にはバスや自動車で次々とやってくる見物客（私たちもそうなのだが……）たち。夜間にはカラフルなライトが滝を演出するという。

初めて滝にたどり着いた先住民や、17 世紀に彼らに案内された欧州の宣教師たちは雄渾な自然に腰を抜かすほど圧倒されたであろう。けれどその衝撃を、観光客としての私たちが追体験するのはむずかしい。

大きな自然が、小さな居場所に押し込められているように見えた。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

■夕暮れ時のケベックシティーの公園（写真提供と説明：筆者）